

アナログ再構成後の活用(27)  
—ベートーベンを聴く(26)—

1. 始めに

前報(26)に引き続き、ベートーベンのアナログ盤を試聴していきます。

2. アナログシステムについての改善の試聴方法

試聴は LINN LP-12 のシステムでアクセサリ関係も最新情報に基づいて実施し、要時 Garrad 401 のシステムも加えます。これまでの状況は、オーディオ資料室の再生経路と変更点 4 に要約しています。なお、バイワイアリングのスピーカーケーブルにケーブルチューナーが装着されています。さらに、追加の変更点については、オーディオ資料室の再生経路と変更点 5 とオーディオ資料室の再生経路と変更点 6 に要約しています。

再生経路は、LP-12 のアームの調整も終わりましたので、次のとおりです。

LP-12→AACU-1000→Stage1030→Brooklyn DAC+→AACU-1000→

P&G フェーダー→300B シングルアンプ

今回は引き続きベートーベンのピアノソナタを聴いていきます。

今回取り上げる盤は、次のアナログ盤です。

**TRIO RECORD PA-1117**

ピアノソナタ 28 番作品 101

ピアノソナタ 30 番作品 109

エリック・ハイドシェック

3. アナログシステムについての改善結果の試聴結果

ハイドシェックは、若くして才能を認められ、コルトーとケンプの薫陶を受けたピアニストです。

盤質はよくありませんが、ハイドシェックがスタンウェイの良さを引き出しながら、独特のフレージングで、ある時は激情を露わに、ある時は静かに抒情的に歌い上げています。ベートーベンをこれほど詩的に表現するピアニストは珍しく、コルトーの指導を受けたということが分るような気がします。一方では、スタンウェイの低音を豪快に引き出すところもあって、ケンプの演奏を思い出させてくれます。

4. まとめ

アナログシステムの再構成の結果、盤質はよくありませんが、ハイドシェックの詩情

あふれるフレージングのピアノの味わいを発揮できるようになりました。

以上